

序

「救急医療は医の原点である」

よく耳にする言葉であるが、救急医療をきちんと実践できるようになることは大変難しいものである。

2004年度から新臨床研修制度が開始されると救急部門での研修は必修化された。これは改正の基本理念ともいえる「プライマリ・ケアの基本的な診療能力」を習得すること、それによって一般的な診療において頻繁に関わる負傷または疾病に対して適切に対応できるように教育的配慮がなされたからにはほかならない。

事実、編者らの勤務する施設における救急部門では、研修医が「経験すべき症状・病態・疾患」の必須35項目をほぼ網羅することが判明している。つまり、厚生労働省が目指すプライマリ・ケア能力に長けた医師を養成するにあたって、救急部門はうってつけであることを証明しているのである。

ただし、いくら豊富な症例が揃っていたとしても、教育体制が整っていなければ研修医の成長は望めない。さらに、救急部門では重症度や緊急度が高い患者が多いことから、診療前に十分な予習を行うことも困難であると言わざるを得ない。本来は成書を読むことで知識と技術を身に付けることが望ましいが、差し迫った状況で迅速に診療を行えるようにするためには簡潔なマニュアル書の存在は不可欠であろう。

本書は救急医療の第一線で研鑽を積んでいる研修医や若手医師にとって必須となる救急医療の手技を、短時間で要点をつかんで診療に応用できるように、豊富な写真と図表を駆使した編集を行っている。その技術や知識はマニュアルとして簡便な記載を心掛けてはいるが、最新のEBM (Evidence Based Medicine) に基づき、国内外の診療ガイドラインに合致し、かつ最新の救急医療のトレンドに則ったものであると自負している。

また、学習の手引きとなるように各項目には、「緊急度」、「習得必須度」、「自立度」を3段階に分けて明示している。このランクを参考にし各自の研修到達度を確認するようにしていただきたい。

本書はマニュアル書という性格上から、冒頭から読んでいく必要はなく、診療の前後に関連する項目に目を通すだけでも勉強になるように工夫を凝らしている。しかし、真の勉強のためには必ず成書に目を通す習慣を身に付けていただきたいと思う。本書がその足掛かりとして利用されることになれば幸甚である。

2009年10月

編者を代表して 児玉貴光

謹告

本書に記載されている診断法・治療法に関しては、発行時点における最新の情報に基づき、正確を期するよう、執筆者、監修・編者ならびに出版社はそれぞれ最善の努力を払っております。しかし、医学、医療の進歩により、記載された内容が正確かつ完全ではなくなる場合もございます。

したがって、実際の診断・治療の際、熟知していない医薬品の使用、検査の実施および判読にあたっては、まず医薬品添付文書や機器および試薬の説明書で確認され、また診療技術に関しては十分考慮されたうえで、常に細心の注意を払われるようお願いいたします。

本書記載の診断法・治療法・医薬品・検査法・疾患への適応などが、その後の医学研究ならびに医療の進歩により本書発行後に変更された場合、その診断法・治療法・医薬品・検査法・疾患への適応などに伴う不測の事故に対して、著者、編者ならびに出版社はその責を負いかねますのでご了承ください。